

熊本県八代における続き間型平面の衰退

鳥飼香代子・北川 晶・佐藤栄希子

Decline of the “Tsuzukima” Floor Plans in the New Houses of Yatsushiro

Kayoko TORIKAI, Aki KITAGAWA, and Ekiko SATO

(Received September 1, 1997)

It is very important to know the recent trend of floor plans, which have been changing rapidly, in order to design new types of floor plans. However, it's very hard to survey the floor plans of all the new houses. Fortunately, we obtained the statistics of the floor plans of all the new houses built in 1993 in Yatsushiro. We examined the date to know whether “Tsuzukima” floor plans are really declining, as has generally been said.

The results are the following; 1) about half of the floor plans are “Tsuzukima” types, and the rest are informal types. Some of informal types have “Zashiki” instead of “Tsuzukima”, and others have “Living rooms” instead of “Tsuzukima”; 2) the informal types are increasing in smaller sizes than “Tsuzukima”; 3) the local building companies and carpenters are making the “Tsuzukima” types; 4) almost all of the order made houses are “Tsuzukima” and almost all of the ready build are the informal types.

Key words : floor plans, Tsuzukima, informal plans

1. 目 的

熊本県において平面型の主流を占めるのは「続き間型（続き間を確保した型）」であることが、約20年前の研究で明らかになった¹⁾。しかし、今日、熊本県の新聞広告や住宅情報雑誌においても、「続き間型」が余りみられなくなり、かつ部屋の洋室化が目立つようになった。

そこで本稿では、現在も続き間型が平面型の主流を占めているのかどうかを明らかにすること、即ち「続き間型」は衰退しているのか、「続き間型」が全住宅のどの程度を占めているのか、「続き間型」以外ではどのような特徴のある平面が出現しているのか、その理由は何なのかを平面型の分析を中心にみてみたい。

「続き間型」が熊本県では主流を占めているという指摘がなされてから約20年が経過していることから、ある地域を限定した悉皆調査により、具体的に「続き間型」の衰退の傾向があるかどうかを検証することを目的とした。

2. 方 法

調査の方法は、地域と年度を限り、住宅建設動向調査による全部の新築住宅の調査とした。具体的には、八代市およびその周辺部の1993年度の新築動向調査²⁾の分析である。

研究方法は、以上のようにして集めたデータを供給主体、平面型、しつらえ、設備の面から分析することにした。

3. 結果及び考察

1) 住宅平面の型分け

型分けについては、一連の住宅平面の研究結果をもとにしている³⁾。図1に各型ごとの代表例を示す。平面の構成要素として、ダイニングキッチン (DK と呼ぶ)、続き間、DK と1間 (ケン) 以上の開口部で隣接する居間などの、主として家族の集まりに使われる居室群 (家族室と呼ぶ) と、それ以外の独立した居室群 (残余室と呼ぶ、2階居室はすべて残余室となる) に分けることができた。約半分の平面において続き間の存在が認められたが、玄関に直結しオモテ (非日常) 領域⁴⁾ への位置付けの明瞭なものと、その点が不明瞭でオク (日常) 領域⁴⁾ 内とみなされるものの、性格の異なる2種類の続き間に分けられた。

I型。「続き間 (オモテ)+居間」型；家族室として続き間と居間があるが、続き間部分は玄関ホールや中廊下でもって他の居室と区切られることで、オモテとオクが明瞭に領域区分され、続き間のオモテへの帰属がはっきりしている平面型。この平面型は系譜的には、田の字型の農家平面の四つ間部分が2室続き間に圧縮されるとともに、土間部分が上げ床化されDKなどが設けられた平面型とみなされる。農村部において最も伝統的な型といえる。

II型。「続き間 (オク)+居間」型；家族室として続き間と居間が必ずあるが、DK・居間と続き間が開口部を通じて連続しており、オモテとオクの空間分離が明瞭でない平面。玄関近くに居間や残余室があり、続き間がオクの領域内に位置するのが特徴的である。

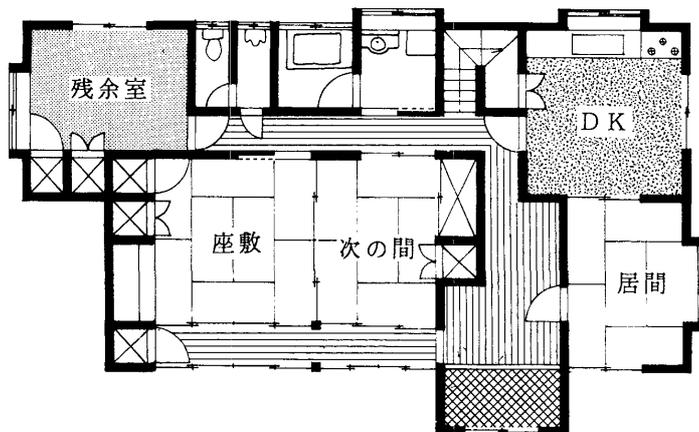
III型。「続き間 (オク)」型；家族室が続き間とDKのみで居間がなく、家族室が狭い平面型の1つ。

IV型。「続き間 (オク)+DK (連続)」型；III型と同じ家族室の構成であるが続き間とDKが連続しているタイプ。III型とともに狭い平面型の1つである。

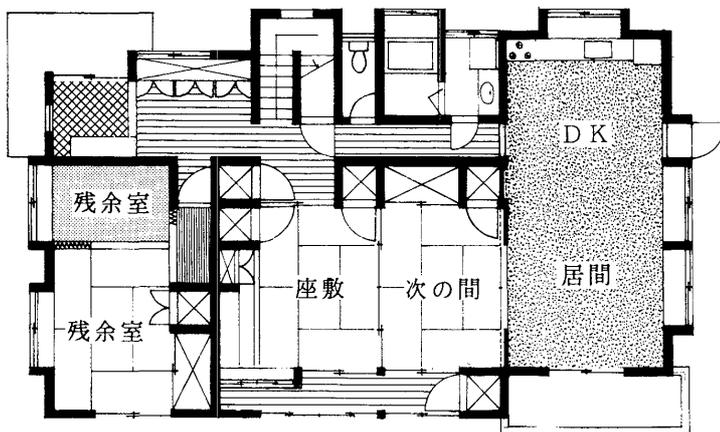
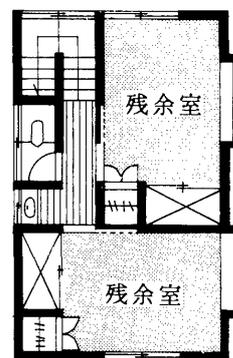
V型。「座敷+居間」型；家族室として座敷とDK・居間をとっている。I型からIV型と異なり特徴的な点は、続き間が座敷に省略されたことで、一般的に都市部にみられる。座敷と居間は分離している。

表1 住宅平面の型分け

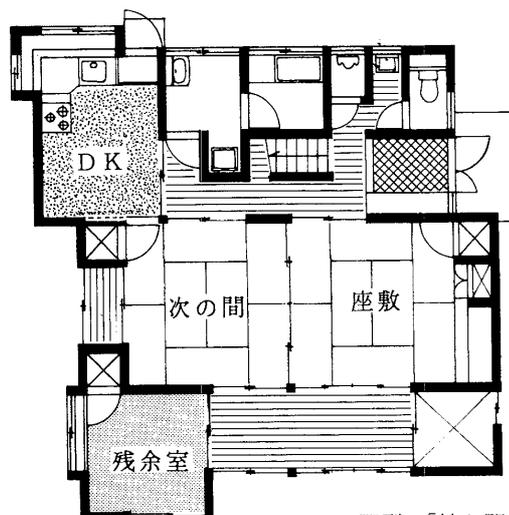
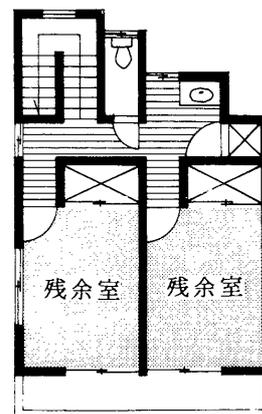
	計	小計	続き間をもつ型				小計	続き間をもたない型		
			I	II	III	IV		V	VI	VII
計	355	176	96	44	13	23	179	55	105	19
市内	306	149	77	39	12	21	157	46	93	18
市外	49	27	19	5	1	2	22	9	12	1



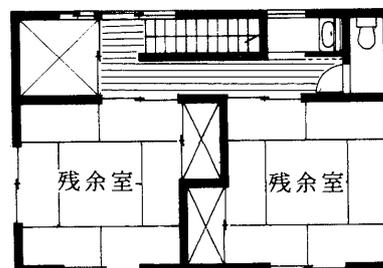
I型；「続き間(オモテ)+居間」型

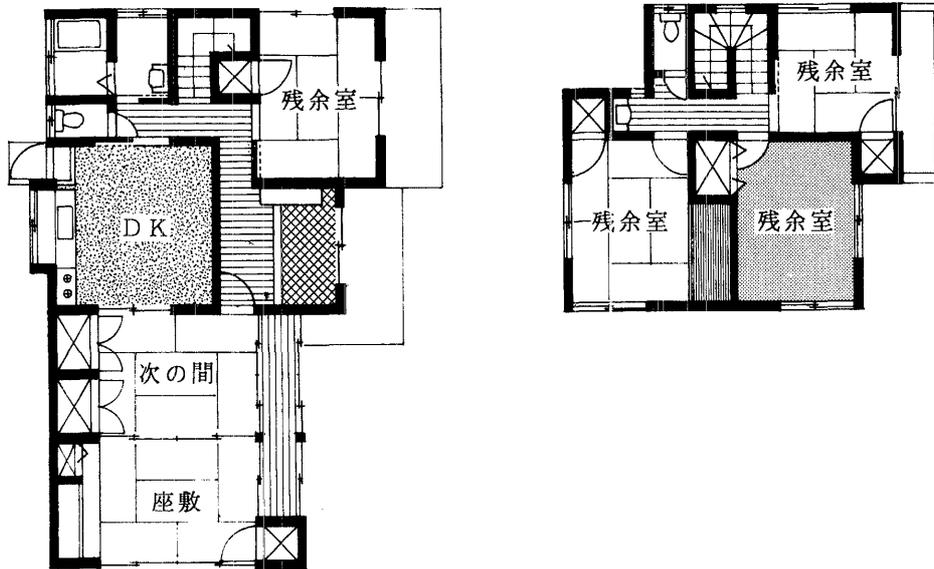


II型；「続き間(オク)+居間」型

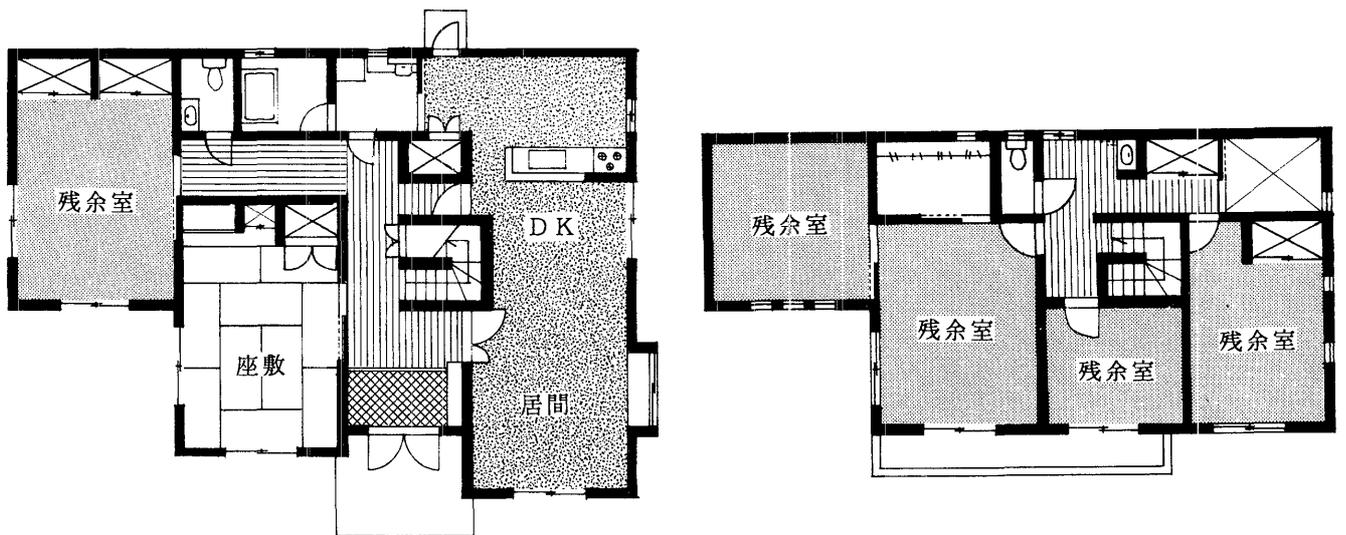


III型；「続き間(オク)」型

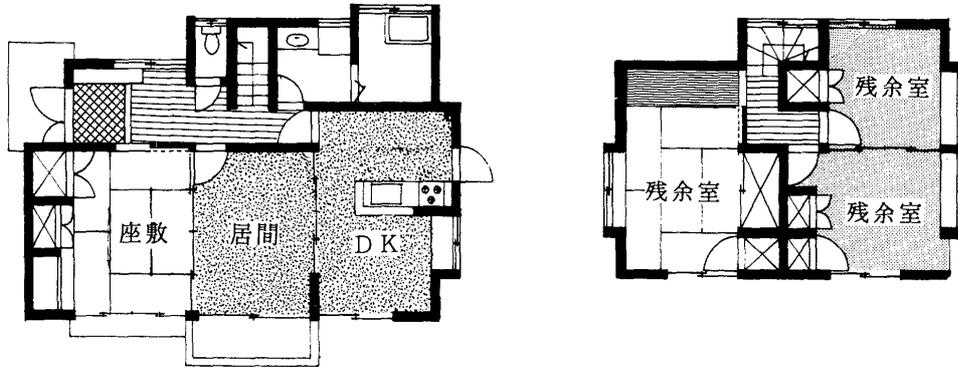




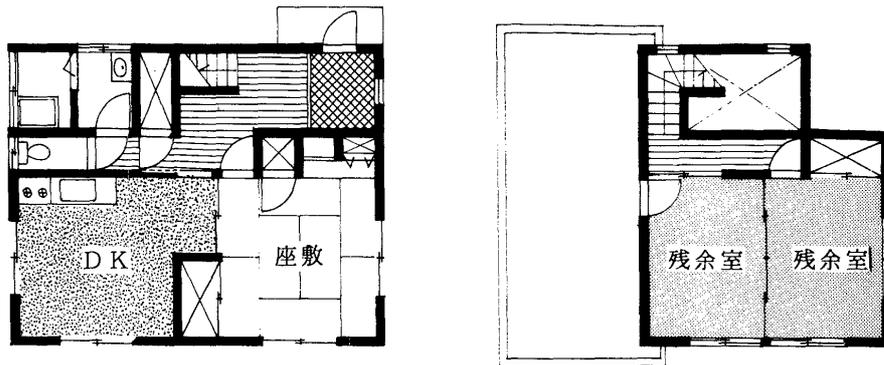
IV型；「続き間(オク)+DK(連続)」型



V型；「座敷+居間」型



VI型；「座敷+居間(連続)」型



VII型；「居間のみ及び座敷のみ」型

図1 平面型別典型的間取り

VI型。「座敷+居間(連続)」型；V型と異なる点として座敷とDK・居間が連続している。そのため家族室として座敷が使われやすく、オクとしての空間利用が強くなるタイプである。

VII型。「居間のみ及び座敷のみ」型；家族室としてDKのほかには居間か座敷のどちらかしかないパターンであり、すべての型でもっとも狭い。

以上の平面型別典型的間取りを図1に示した。また、調査対象を以上の7タイプに型分けを行った結果が表1である。

表1より、続き間を持たないタイプと持つタイプが、ほぼ半数づつとなっていることが大きな特徴といえる。続き間を持つ型の中では、I型の伝統的なオモテとしての性格を持つタイプが最も多く、全体の半数を占めているが、残りの半数も、オクに取り込まれたり、DKと続き間しか持たないタイプや、さらには、そのDKと続き間が連続しているなど、続き間を居間として利用することを想定していると考えられるタイプが25%程でできている。即ち、続き間を持つ型の中でも、続き間の格式性⁹⁾が低下してきていることを予測させるタイプがみられることが大きな特徴である。

調査は、八代市及びその周辺(市外)を対象としたが、市内と市外とで顕著な差はみられなかったので、表2以降の分析は両者一括して行った。

2) 続き間の簡略化

前節でも説明したとおり、I型という平面型は、今までの研究により、続き間を持つ型のなかでも、最も伝統的な型であることは明らかではあるが⁹⁾、続き間の定義として、次の3つを満たすことが伝統的な条件であると指摘されてきた。まず南側に面し東西に連なるものであること、広縁を持つこと、玄関は南側に取られていること、この3つである。調査対象のI型の中にもこれらの条件を全ては満たしていない続き間、すなわち簡略化された続き間が現れてきている。それを具体的にみると、座敷飾り、広縁を持ち、かつ中廊下などで他の部屋と分離させた簡略化の行われていない場合と、座敷飾り、畳敷、玄関の向きなどが簡略化され、広縁もなく、かつ他の部屋(DKとの場合が多い)と襖などで連続した場合に分けられた。

ここでは簡略化の具体的な箇所について分析を行った(表2)。

表2 I型の簡略化

簡略の内容	計	市内	市外
計	39	31	8
南北続き間	5	5	-
広縁なし	3	3	-
南北続き間・広縁なし	17	13	4
南北続き間・玄関西向き	2	1	1
広縁なし・玄関東向き	2	1	1
玄関東向き	7	5	2
玄関西向き	1	1	-
玄関北向き	1	1	-
南北続き間・広縁なし・玄関西向き	1	1	1

八代市において確認されたI型は96例であり、そのうちの39例が簡略化の傾向を示している。簡略化の形態は表2のような9タイプが確認された。続き間が南北に連なる例と広縁を持たない続き間が多く、最も多く確認されたのはこの両者を併せ持つタイプであった。続き間は、どこか1ヶ所が簡略化されているのではなく、様々な簡略化を併せ持つことで、住宅平面に適応しているのである。

3) 続き間を持たない型の出現

続き間を持たない型に注目すると、表1より持たない型は2つの新しい型を出現させていると考えられる。

一つはV型で、図1よりV型の特徴を整理してみると、①DKと居間（大半が洋室⁶⁾）の連続、②居間と座敷の分離、③玄関の南面化が指摘できる。これはI型の続き間のうちの次の間を省略した場合と類似したものといえる。このことからV型は、I型の次の間簡略化による出現と推察できる。

もう一つはVI型で、同じく表1より、DKと居間の連続、居間と座敷の連続、玄関の非南面化(南面にこだわらない)の特徴を示しており、これはII型の続き間のうちの次の間を洋室化した場合と類似したものといえる。このことからVI型は、II型の次の間の洋室化による出現と考えられる。

以上の出現のプロセスを図式化したものを図2に示す。続き間を持たない型の出現は、続き間の簡略化の流れの中で、抵抗なく洋室化傾向を受け入れたりさらに続き間そのものも省略することが行われ、その結果引き起こされていることが示唆される。

4) 続き間型衰退の背景

最後に、なぜ続き間型が衰退したのか、その背景をみてみたい。さて、要因については、建築費が高つくこと、家族構成が核家族が多くなったことなど⁷⁾多くの点が考えられるが、本稿では、建設動向調査の項目で、平面の型と明確な相関関係のみられた点についてのみ考察することとする。

I型「続き間(オモテ)+居間」型 —————→ V型「座敷+居間」型



II型「続き間(オク)+居間」型 —————→ VI型「座敷+居間(連続)」型



図2 続き間を持たない型出現のプロセス

表3 敷地面積

m ²	計	小計	続き間をもつ型				小計	続き間をもたない型		
			I	II	III	IV		V	VI	VII
計	355	176	96	44	13	23	179	55	105	19
～99	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
100～149	14	7	-	2	1	4	7	2	2	3
150～199	44	10	1	6	1	2	34	11	18	5
200～299	124	41	10	16	4	11	83	27	53	3
300～499	110	68	46	13	5	4	42	10	24	8
500～699	33	26	20	3	1	2	7	3	4	-
700～999	22	18	14	3	1	-	4	1	3	-
1000～	7	6	5	1	-	-	1	1	-	-
不明	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-

(x²検定p<0.01)

① 敷地面積

表3より、オモテとしての性格の続き間を持つI型が、やはり最も広い敷地面積を有しているといえる。VII型は、居間及び座敷しか持たない平面構成のため、最も狭い敷地面積で現れる型だといえる。残るII・III・IV・V・VI型は、ほぼ同程度の範囲で分布がみられる。この5つの型は、I型のように特に広い敷地面積でもなく、VII型のように極端に敷地面積に制限があるわけでもない。つまり同じ程度の敷地面積の条件を持っているわけである。この様な同条件の中で型ごとに比較してみたい。ここでも、やはり続き間を持たない型が続き間を持つ型よりも圧倒的に多い。このことは、続き間を確保できる程度の敷地面積を有しながらも、続き間をとらない、続き間を必要としないという傾向を表している。

次に、敷地面積と続き間そのものの簡略化との関係のみてみると、表4より、続き間が簡略化されていない場合は敷地面積が広いところに多く、続き間の簡略化は狭いところを中心におこっていることがわかる。

表4 I型の簡略化と敷地面積との関係

m ²	I型	I型の簡略化
計	96	39
～99	-	-
100～149	-	-
150～199	1	1
200～299	10	9
300～499	46	18
500～699	20	9
700～999	14	1
1000～	5	1

② 供給形態

注文住宅と建て売り住宅という2つの供給形態から分析(表5)するならば、前者の方が依然として多数である。しかし、続き間を持たない住宅における建て売り住宅数は、全住宅数の13.3%を占める。つまり、建て売り住宅における続き間を持たない住宅数は78.0%にも達することが明かとなった。

表5 供給形態

	計	小計	続き間をもつ型				小計	続き間をもたない型		
			I	II	III	IV		V	VI	VII
計	355	176	96	44	13	23	179	55	105	19
注文 販売	295 60	163 13	93 3	39 5	11 2	20 3	132 47	47 8	71 34	14 5

(χ^2 検定 $p < 0.01$)

このことは、建て売り住宅供給の増加により続き間を持たない住宅が増え、続き間を持つ住宅が衰退しつつあるともいえる。

③ 業者タイプ

業者タイプについては表6をもとに分析する。

全住宅において地元大工、地元工務店による供給が74.6%を占める。続き間を持つ型では85.2%が地元大工及び工務店であり、大手メーカーの割合が8.0%であるのに対し、続き間を持たない型については、大手メーカーによる供給が22.3%を占めている。つまり、全体的にみれば、今地元大工及び工務店による供給が目立ってはいるものの、続き間を持たない型における大手メーカーの参入は明かであり、着実に都市部から農村部へと進出しつつある。今後も、大手メーカーの供給住宅が増加していき、続き間を持たない住宅が増えていくことが予想される。

表6 業者タイプ

	計	小計	続き間をもつ型				小計	続き間をもたない型		
			I	II	III	IV		V	VI	VII
計	355	176	96	44	13	23	179	55	105	19
地元大工	195	117	69	20	8	20	73	23	37	13
地元工務店	77	33	13	15	3	2	49	9	38	2
熊本市内	26	12	4	6	2	-	14	5	8	1
県外工務店	3	-	-	-	-	-	3	1	1	1
大手メーカー	54	14	10	3	-	1	40	17	21	2

(χ^2 検定 $p < 0.01$)

注 熊本市内とは、熊本市内工務店のこと。

4. 結 論

続き間に注目すると、まず続き間を持つタイプと持たないタイプがほぼ半数ずつとなっていることが大きな特徴である。更に続き間を持つタイプは、続き間の簡略化の傾向がみられ、続き間を持たないタイプの多くは座敷と洋室の居間を持つことから、続き間のうちの次の間がDKと連続することにより、居間としての使われ方となり、居間が洋室のLとなる、つまり次の間の洋室化がみられることが特徴である。続き間を持たない住宅が全体の約半数を占めているが、「敷地面積が狭い」という同じ条件下においても、続き間を持たない住宅が持つ住宅の2倍という注目すべき結果となった。供給形態をみても、建て売り住宅に占める続き間を持たない住宅数は圧倒的である。このことは建て売り住宅供給が増加することにより、続き間を持たない住宅が増え、続き間を持つ住宅が衰退していくといえる。又、業者タイプでは、続き間を持つ住宅と持たない住宅の双方において、地元の大工及び工務店による供給が多い。しかし、続き間を持たない住宅には、大手住宅メーカーによる供給も目立った。このことにより、大手住宅メーカーが着実に都市部から農村部へと参入してきていることは明かであり、今後も大手住宅メーカーの供給住宅が増加していき、続き間を持たない住宅が増えていくことが予想できる。

本稿では平面型及び供給形態等からの分析であり、以上の結果の裏付けとしての住み方調査などによる分析がなされていないため、これを今後の課題とする。

謝 辞

最後に研究の手助けをして下さった、同研究室卒業の安富かおりさん、また同研究室のその他の方々に対し、厚く御礼申し上げます。

注及び参考文献

- 1) 1977年から住宅の地方性という視点で全国的な調査が建設省の提案として行われた。その1対象として、九州では、熊本及び鹿児島住宅平面の調査が行われ、両県とも続き間を持つ型が支配的であることが報告された。参考文献としては、鳥飼香代子：住宅 vol.30, 熊本・鹿児島住宅—支配的な続き間型—, 1981, pp.74-80
- 2) 新築時に提出する確認申請書をもとに集計された資料
具体的内容は以下の通りである。
平面型、敷地面積、延べ面積、供給形態、業者タイプ、構造、DKの広さ、座敷の広さ、続き間の広さ、LDKのタイプ、玄関の向き、トイレ、納戸数、居間の和・洋
- 3) 松原小夜子他：続き間型独立住宅に関する研究、日本建築学会論文報告集、第303号、1986、p.34参照
- 4) オモチ、オクについては、民俗学の用語で、オモチ領域とは祭事を中心とした空間。オク領域とは日常生活のための空間。鳥飼香代子他：日本建築学会論文報告集、地方における高齢同居世帯の住様式論的研究、第486号、p.117-127
- 5)、6)、7)は、続き間の位置づけに関することで、参考文献は3)と同じ。